

大塚全一先生の 御逝去を悼む

(社)日本都市計画学会顧問
長岡技術科学大学名誉教授 石川 允

大塚全一先生には本年4月21日御逝去された。
81才であった。

私事に涉り恐縮だが、私にとって、旧制高校の先輩である山田正男さん、次いで大塚全一さんと、親しくして戴いた方々が昨年から本年にかけ、相次いで鬼籍に入られた。誠に寂寥の感、哀悼の念を禁じ得ない。

大塚さんはまた、弓道部の先輩でもあった。後輩達から「全ちゃん」の愛称で呼ばれ、「東大の土木へ入るには勉強より空手」の遺言を残し、部を去って行かれたとの伝説が残っている。

お陰で旧制武蔵高校の弓道部からは全ちゃんまで東大土木との縁は切れた。

その「全ちゃん」と始めて会ったのが大阪府の都市計画課時代である。新任の課長代理が来られるというので緊張して待っていた。その課長代理が私の席のところへ来られ、上体を45°に曲げて「大塚です。よろしく。」といわれた。その時眼鏡越しに「ニヤリ」と笑われた人なつこい顔が印象的であった。大阪では市の戦災復興、府下各市町村の幹線街路網を地方計画と称し実施しているのを指導された。その業績は今も残っている筈である。その頃である。時々私の隣に坐り込んで、「おい、何をやっているんだ」「マスタープランという言葉を知っているか。」との駄弁りが始まる。「将来の都市の姿を量的なものを含め、考え予測し計画する。」大塚さん特異の分かったような、分からないような答えて話は終わる。

東京へ帰られてからは、これも故人となられた奥田教朝さんの後を追いかけるような職につかれた。都市局の二代目技術参事官になられたころの話である。「東京環六の計画は通常の環状線と違う。始めて全部の交差点を連続立体交差でまとめ



故 大塚 全一 氏

本会の名誉会員大塚全一氏には平成8年4月21日永眠されました。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

社団法人 日本都市計画学会

たもので」といっては現地を見に行かれた。大塚さんの計画になるか否かは知らないが、少なくとも実施には関与されたのであろう。市街地内のバイパス道路の創始の形態として歴史に残るものである。当時の建設大臣は河野一郎さん。大臣が自ら首都移転、東京、大阪、名古屋の再開発を計画していた時のことである。大阪の都市計画街路「筑港深江線」の高架を提唱され、併せて周辺の間屋をその高架の下に入れる重構造の再開発が提案され、それが主要な課題となった。「大塚全ちゃん」の発案である。

大学へ行かれてからは、土地利用計画の研究も始められたようで、都市計画もオールラウンドになり、数量的解析も試みられたが、「おい、都市計画には数量的解析が必要だよ。」とお会いするたび毎に言われていた。早稲田では初めての母校出身教授「中川先生」を生む等幾多の俊秀を輩出させられた。

最後にお会いしたのは大塚さんの旧制高校の同級生三矢さんの御通夜の時である。私の家へ訪ねて来られ、「三矢の家は何処なの。」御案内かたが

と一緒に歩き乍ら年をとられたものだなあと思った。

本年の2月、かつての弓道部の担当の先生が亡くなられた。奇しくも浅野英さんの旧制高校時代の親友である。「俺は平井さん（その弓道部の先生）は知らねえよ。」と云っておられたようである。後で聞いた話である。そうして全ちゃんはとうとう平井先生の御通夜や告別式には現れなかった。なんとなく同年代の人の葬式は嫌だったようである。半年を出でずして後を追われた。これが全ちゃんの最後の消息である。

私達にとって全ちゃんは都市計画界のよき兄貴であり、先輩、先生であった。未だ生きておられるような気がする。会って御話をして置かなくてはならないことが多く残っているような気もする。都市計画界への最後の遺言は「マスタープランを造りなさい。御大切に」であったように思う。

御冥福を御祈り申し上げる。

大塚全一先生の業績

早稲田大学教授 中川 義英

大塚全一先生の生涯は、60余年の永きにわたり都市計画にはじまり、都市計画におわると云った感がある。1939年東京帝国大学を卒業され、社会的な不安・物資的不足との克服に懸念な努力が為されていた時期に殆ど何の疑念も躊躇もなく、都市計画山口地方委員会に勤められ都市計画の道を辿り始められたと聞かされておりました。海軍で働かれた後、戦後、武蔵工業専門学校教授を短期間なされた後、再び都市計画の道に入られ、京都府、大阪府の計画課、奈良県の道路課で足掛け11年間関西で奉職されております。

1957年から建設省に勤務され、途中2年程首都高速道路公団に出向されましたが、1966年中国地方建設局長で退官されるまで足掛け10年を主として都市計画と道路の分野で顕著な業績をあげられ、行政における都市計画の発展に信念を持ってあたられるとともに、指導的役割を果たしてこられました。この期間は社会資本、特に道路・街路の拡充がおこなわれた時期であったとともに、都

市局技術参事官として東京オリンピック関連の事業の取りまとめにあたってこられております。その後、東京都の道路監、1969年から帝都高速度交通営団（地下鉄）の理事という重職を重ねられ、足掛け5年、軌道駅舎等の建設保守を通して大都市の大量輸送に関与された時期になります。

1975年工学博士を授与されるとともに、早稲田大学理工学部教授に嘱任され、1985年までの十年間、国土計画及び地方計画、都市計画、交通計画、土木法規の講義と卒業論文の指導、修士課程、博士課程の学生たちの訓練、研究、教育をされ、七十歳で退職された。この10年の間、物事に対処する方法を知識としてではなく、知恵として身につけさせようと思われました。それとともに10件を越える学位論文の審査をされるとともに、主査として、多くの教育者、研究者、実務者を一歩ずつ育成し、前進させてこられました。

また、1985年には、勲三等瑞宝章を賜われました。特に戦後の荒波を不屈の闘志と信念をもって生き抜かれ、今日の道標をたてられたといえます。

大塚全一先生の研究は、若輩の考えていることの先を常に進まれ、その中で多くの道筋とポイントを示されるとともに、納得がいくまでご自身で作業されるという態度から生まれてきたものでした。国立国会図書館客員調査員として1978年からの3年間をすごし、言葉の使われ方の変化と人の意識の流れに興味を持たれ、「広場考（国会図書館調査立法考査局・レファレンス）」をとりまとめています。これは、都市の構成要素として広場を研究していく上で基礎を与えたものです。また、「土地と人とまちとむら（丸善出版サービスセンター）」は日本の土地に関する制度・法制と人との拘わり合いを歴史的に通観し、日本人の土地についての観念と感性を探った内容であり、集大成ともいえる研究であり、今後の研究の基本となっています。

以上のように大塚全一先生は、都市計画の分野において、そのバイタリティあふれる活力のもとに、行政ならびに教育・研究の場において、数多くの成果を上げ、都市計画の発展に専念されるとともに、将来の進展を念願されておられ、多大な貢献を尽くしてこられました。

合掌。